大きな物体と屍の群で抜け出そうにもない。頼みの醤油樽がじゃまになったので放り投げてしまった。浪の揺れるままに、ひとかたまりになっている屍を踏み分け、やっと這い出ることができた。そこからは、救命胴衣を頼りにざわめく方へ泳いで行った。

そこでは、一つのイカダを何十人もの人々が、奪い合っている。すがりついても、力のあるものが、力の弱い者を振り落としてくい下がって行く。やっと這い上がったかと思うと、また次の人に引きずり落とされる。体の小さい私は、這い上がる自信を失っていた。

しかし、とりすがらなければ死んでしまう。私は、さっとイカダの裏の方へ回った。ここぞと真ん中めがけて、もぐり込み、心棒を力いっぱい握りしめ、体をできるだけ小さく丸めて、うつむいておしだまっていた。「後から這い上がってきた。」と男の人が、拳で私の背中や腕をついたが、ひきずり落とそうとはしなかった。

私はなおも、おしだまったまま大人たちの中に、かくれるようにふんばって、命限りのイカダの奪い合いも、数分後には、十人で占領することができた。

一夜が明けて見ると、乳呑児の男の子以外は全員女性であった。そのうち女の子は、私を含めて二人だった。男たちは、余りにも自らの体力を過信してエネルギーを使い果たしたのだろうか。

漂流二日目の昼過ぎ、あちらこちらに、他の人々が、幾人かずつ組になって、漂流していた。私達のすぐ近くを学生服に、白いカバーのされた黒い帽子をかぶった一人の少年が、床板一枚位の広さの板に、またがって流れていた。

速くの方で、誰かが呼んでいる声が風に乗って聞えた。私は、なんだか、「啓子！」と兄が呼んでいるような気がした。

三日目に私は、睡魔にめり込まれそうになった。眠ってイカダから、落ちては大変だと、自分の身を強くつねったりした。

「今頃、お母さん達は、おいしい食事をとり、フトンの上にゆったり寝ているのだろうか。」と故郷の母や弟妹のことが、無性に恋しくなった。熱い涙が初めて、こぼれ落ちた。腹がペコペコ、背中にくっついたようだった。

何日目かの昼過ぎ、頭の上を日本の飛行機が低空してきた。みんないっせいに、

「オーイ！　たすけてくれ！」と手を振った。しかし、飛行機は、それっきり姿を見せなかった。「島は見えないか。」「助け船は来ないか。」「あれは、船の帆柱ではないか。」などと、背伸びをして目を見はったが、いつしか浪のうねりと流れの速さで消えていった。島なのか、雲なのか見分けがつかない。

漂流中流れてきた竹筒を拾い、中に入っていたすえたごはんを一口ずつ食べた。またある時、マユの梱包がイカダに寄ってきた。マユを食いちぎって中の蛹を食べた。二、三個食べたら流れてしまった。

二人の老女が、一言もいわず死んで流れていった。四十歳ぐらいのおばさん二人もいない。前の方にいた私は、何時どうしていなくなったのか分らない。乳呑児が、母親の乳首にかみついたと痛がっていた。その子もとうとう母親の腕の中で息をひきとった。何時のまにか、母親の腕から浪にさらわれてしまった。

とび魚もとび込んできたが、ひっとらえたのは私で、食べたのは、別の人だった。くやしさの余り、またもや、涙がこぼれ落ちてしまった、

体は陽に焼け、皮膚は、赤く黒くただれだした。頭髪は、バサバサにちぢれ、抜け毛も

多くなった。モンペには木ぎれが入り込み、薄いブラウスは破れ始めた。鱶が遠くであばれていた。老爺にかみついているようであった。みんなは驚きの目を見はった。鱶をさけるようにイカダの舵を左へ回した。

その時です。百メートルほど先から、鱶がこちらへ向かってくるではないか。

「今度は、私の番だ。」先頭にいる私は、細い手と足をなでさすって運を天にまかせ、

「天の神様、海の神様、どうか私をお助けください。」と両手を合わせて、一心に祈った

そして目をあけた。鱶は向きを変えてそれていった。みんな一言もいわずだまっていた。

五人だけになってしまったイカダは、流れの速さを増していた。

六日目の暮れ方、誰かが、

「あれ！島じやないかしら、ほれ！ほれ！よく見てごらん。山のようだよ。」と今までにない元気な声で叫んだ。私は、両唇が堅くくっついていて、とっさに言葉が出なかった。

「さあ、さあ、早く漕げ。向こうに着けよう。」

夜になると、絶望は再びやってきた。島を見失ってしまったのだ。みんな気力を失い今にもイカダから倒れ落ちそうになった。

うっすらと夜明けが近い頃、島はすぐ目前に突っ立っていた。イカダは、島をめがけてどんどん押し流されていった。私達は助かったのです。一週間目にやっと、自然漂着したのです。イカダを降り、四つん這いになって陸地へ向かった。この手でこの足で、石や砂を握りしめたのです。私達の喜びは、言葉に言いつくせない。目がくるくるまわり、体が安定せず両足では立てなかった。しばらく岸のくぼみに、うつぶせになって、気を静めた。

一人の女の子は、上陸寸前に息をひきとった。母親が悲しんでいた。

ここは、無人島だとあとでわかった。水を求め、草をかみ、やっと我にかえった頃は、また、次の不安におののいた。

生き残ったのは、十人中たった四人だけになってしまった。大人三人に子供は私ひとりであった。

太陽の昇り具合いから、十時頃だったろうか。

「あれ！くり舟が、二艘沖へ向かって出て行くよ。」とひとりのおばさんが叫んだ。力の限りの声をふりしぼって助けを求めた。四人の声は、ただ海風に散って行くばかりである。

私が、小高い岩によじのぼり、三人のおばさん達は、私の音頭に合わせて、声量の限りを出し切って叫んだ。

「一、二、三」「おう－い！」「おう－い！」と、その時です。船頭さんが、櫂をとめてこちらを向いたのです。その時ぞと、私達は倒れんばかり両手を振りまくった。二艘のくり舟は、確かに、こちらに向きを変えて進んできたのです。私達は、再び助かることができたのです。ここまで頑張り通してきて本当によかった。おばさん達が、事情を話していた。私は、ぐったり横たわったままだった。二艘のくり舟には、合わせて十人ぐらい乗っていた。無人島の近くに住む、お百姓さんたちであった。

飯盒から御飯とやわらかい黒砂糖を出してくれた。私は五本指をなめつくして食べた。あの島での水と、ごはんと、黒糖の味は今も忘れない。生きている実感が、初めて湧いてきた。この御恩は、一生忘れない。

古ぼけた麦わら帽子をかぶった老人は、特に私に親切であった。

ひと息入れると、海抜三百メートルぐらいの無人島を後にして、おじさん達の島へと、

くり舟は走った。入り江らしい砂浜では、子ども達が遊んでいた。村の入り口に郷子の木が立っていた。

私達は、巡査駐在所に似た所へ運ばれ、島の人たちの手厚い看護を受けた。高窓から村の人たちが、大勢顔をのぞかせていた。四、五人の老母達が、団扇であおいでくれた。温かい食事の他に、ゆで卵や、きびなご（スルル）なども出された。人口五十人ぐらいと聞いたおぼえだが、あるいは、五百人だったかも知れない。島の名も聞きもらしたが、七島あたりではなかったろうか。（注－字検と思われる）

翌日、私達は、島の人々に別れを告げ、巡視してきた船で、大島古仁屋の桟橋に着いた。漂流途中船で救われた人たちと合流して下船し、月あかりの中を素足のまま、自分の影を追って、古仁屋のある旅館に収容された。

安波の山道を歩いている時、

「もう一度、お母さんに会いたい。」と言った六年の兄と、東京の息子（私の父）に会えると喜んでいた祖母も帰らぬ人となった。

姉も兄嫁も生きていた。他の六世帯は、全滅した。

【記録と証言　あゝ学童疎開船対馬丸　編著：新里清篤　発行：対馬丸遭難者遺族会】

マラリア地獄の波照間島

西里スミ

戦争を実感

私の家は、波照間の南部落にある。父は私が初等科四年のときに亡くなり、また長男兄も早くに病死、女四人、男一人の私たち姉弟は、女手ひとつで育てられた。昭和十七年、私は波照間国民学校高等科を卒業、この年に初めて八重山でも実施された女子師範の試験を受けたが失敗した。合格者は二十一人中三人だった。私は進学をあきらめきれず、波照間校時代の恩師で、当時大浜校に勤務していた竹原孫恭先生の御宅で一年間、洋裁学校へ通いながら勉強した。当時、石垣島では、軍が平得に飛行場を建設しており、私たち洋裁学校の生徒も班を編成し徴用を受けた。また島から四十代の人たちを中心に徴用され、次女姉が炊事班長として来ていたことから私も手伝ったものだ。

十八年を迎えると、私は島へ帰った。母校の小使いが退職し、後任を深している、というのである。私はすぐに採用され、新しい生活が始まった。当時の生徒数は三百人を超え、先生方のお茶くみ、帳簿整理と、けっこう忙しい毎日だった。また青年学校では、いま考えるとばかばかしく一度も役に立たなかったワラ人形を使っての竹槍訓練、バケツリレーの防火訓練などを真剣にやったものだった。

戦争が身近に感じられるようになったのは十九年十月、友軍の戦闘機一機がモウバルに不時着してからである。操縦士は、ケガはなかったが意識を失っており、部落の人たちが公民館に運んだ。敵艦に体当たりをかける特攻機だとの話を聞き、戦争を実感した。私が生徒のころにも友軍の爆撃機が不時着したことがあるが、そのときはただ物珍しいだけであった。

山下“先生”を歓迎

しかし本当に恐しく、残念なことが始まるのは二十年になってからであった。この年の二月、青年学校に新しい指導員がみえるというので、私は職員と一緒に準備をし、盛大な歓迎会を開いた。その日、島にやってきたのが例の山下“先生”であった。歓迎会で山下先生は、山下虎雄であると名乗り、おとなしく言葉使いも大変やさしい人であった。軍人で、まして中野学校出身の特務兵という感じは、まったくなかった。ただ体格は良く、学校からちょつとでも外出するときは、半ズボンの腰にいまの警察官が腰に下げる警棒のような、もっと太い棒を下げていた。私は、おかしなことをする先生だと思っていた。山下先生は、富嘉部落のはずれにある西島本家に下宿していた。

強制疎開命令

その山下先生が人が変わったようになるのは、戦争が近付いてからである。顔つきがだんだんと変わり、本性をムキ出しにしてきた。三月下旬、村役から西表への疎開命令があり、部落役員がそのことを協議した。学校の識名校長先生が強硬に疎開に反対したら半ズボン、軍服姿の山下先生が軍刀を抜いて脅した、ということである。私はそれまで彼の軍服姿を一度も見ていないし、まして軍刀を振り上げるところも見た訳ではないので、島の人たちの話を聞いても、あの先生がそんなことをするなんて、とまったく信じられなかった。

協議は何回も行なわれたが、島の人たちが「西表にはマラリアがある。島にはホラ穴がいっぱいある。避難所はいくらでもある」といくら反対しても、彼の軍刀の前では通用しなかった。山下は「この島にも米軍が上陸する。疎開は軍命であり、きかないものは非国民。俺が斬り捨てる。牛馬も全部殺し井戸に毒を入れる」と言っていた、という。誰も反対できなかったし、島の人たちは「非国民と言われては島の恥」と言っていた。

それから疎開準備が始まった。石垣島の旅団本部から部隊が来て牛を殺しはじめた。島の人ではどうせ全部西表に持っていけないし、島に残しておくと米軍が上陸した場合、敵の食糧となるから利敵行為であり、その分を軍がとる、ということであった。挺身隊の若い人たちが桟橋近くのカツオ工場で肉を薫製にした。部隊や島の人たちが、島のあちこちで次々と牛をつぶした。毎日朝から夕方まで牛の悲鳴が聞こえた∂南部落のすぐ近くでも牛を殺していたが、私はこわくて絶対に近寄らなかった。そのころの私は．毎日学校の疎開準備に追われていたから、その作業には出なくてもよかった。しかし日曜日になると、部落の人たちの共同作業に出なければならなかった。作業は、まず肉を大ナベでたいたあと小切りにし、金網にのせて煙でいぶした。ところがそれでは間に合わない、というので近<の石の上にも肉をのせて乾燥した。また作業は、煙を出すと空襲の目標になるから煙は絶対出すな、ということであった。薫製にするのに煙を出すな、とは無理なことを言うものだ、と思っていたら案の定、空襲があって火も消さぬまま近くのホラ穴に逃げたこともあった。平日は学絞の準備である。重要書類や備品を次々と箱詰めした。

三月三十一日、次女姉が男の子を出産した。婚約者は防衛召集されており、実家で母と二人きりの出産であった。それから三日後、空襲があった。部落上空から機銃掃射をして

おり、私の家でも機銃弾が庭の桑木の幹を貫通、一発は家の板戸、縁側を貫通していた。母が次女姉と赤子を裏座に抱いていき、畳をかぶってふるえていたという。十五日後の四月十五日、私を除く家族全員が南風見に出発した。私は仏壇の父と兄の位牌を紙に書き移して持たせた。

南風見での生活

それから間もなくして私も疎開した。疎開はすべて山下が取りしきっており、今日は○○部落第○班と順序が決まっていた。移動はすべて夜のうちになされた。私が乗ったカツオ船は、鹿川に着き休憩したが、日中白浜の方から爆音が聞こえ、あわてて山の中に避難した。翌朝陽が昇らないうちに船を出し、南風見についた。先発隊の人たちがつくった疎開小屋があり、私たち南部落はシタダレ川の東の方であった。共同小屋で何世帯もの人たちが同じ小屋で泊まり炊事も一諸という共同生活をすることになっていた。

疎開完了後、数日して形ばかりの入学式が行われた。私の弟もその時の新入生であった。この子は、年よりませた子で皆にかわいがられており、入学を大変喜んでいた。しかし授業らしいものは行われず、識名校長先生が生徒を集めて講話をする程度で、時々は山下も何やら訓辞していた。学校の重要書類は、某先生が担当で大事に保管していた。当然私の仕事もなく、学校の上級生、青年、女子青年約三十人で組織された挺身隊に加えられることになった。まず山から材木を切り出してかやでふいた病院を建てた。病院といっても医介輔の先生がいるだけで薬もある訳でなく、ヨモギをせんじたものがあるだけであった。次に挺身隊小屋を建てた。通路をへだてて東側が男子、西側が女子の部屋で、隊員は全員ここで寝起きし、食事のときだけ自分の班に戻った。山下もここに泊まった。挺身隊では毎朝軍隊式体操、点呼、服装検査をした。まるで軍隊のようなものであった。私たち隊員は常時、部落名、姓名、生年月日を明記した板切れの名札と引っぱればすぐにほどけるよう特殊な結び方をした命綱を腰に下げていなければならず、これを忘れると体罰が加えられた。もはや某先生は、山下の忠実な部下であり、山下の言うことは何でもきいた。もちろん私たち隊員もそうである。山下が右と言えば右を向き、左と言えば左を向いた。山下に引率され、由布や古見に疎開状況視察と言っては四列縦隊を組んで行進させられたこともあった。真昼のことでもあり、いつ空襲されるかヒヤヒヤしていた。古見では船着き場の船の中で一夜を明かしたこともある。また一度は、衛生状況が悪いといって隊員にハエを捕らせたこともある。竹筒にハエを入れて集合させられたが、ハエが少ない人は、山下や某先生に青竹がバラバラになるまで殴られたり、蹴られたりした。大変恐しいものであった。もちろん私たちもただではすまなかった。集合が遅い、行動が鈍い、草刈り鎌がきれいにとがれていない。様々な理由で砂浜に一列に立たされてビンタをはられたり、正座させられたりした。なぜなのか今でもわからないが、山下は私ともう一人の女子青年に両親、家族へあてた文章、日ごろ思っていることを文章に書かせたことがあった。「これをどうするんですか」と私が聞くと、山下は「これもひとつの勉強だ」と言った。このほか主な仕事は、男子隊員が警備、私たち女子が共同炊事のためのまき拾い、マラリア患者の看護などであった。

マラリア発生、姉を亡くす

しばらくすると一番恐れていたことがおこった。マラリア患者が次々に出始めたのである。私の長女姉もかかり母は幼い弟と妹、病人の姉、それに次女姉、赤子を抱えて大変難儀をしていたからである。しかし看病のかいもなく、六月に入って長女姉は亡くなってしまった。薬も何もなく、あるのは熱さましのヨモギ汁だけ。みるみるうちにやせて高熱を出し苦しんでいた。部落中の人が集まり、とむらいをした♂姉の遺体は、シタダレ川の支流を越えて北側のススキ林のなかに埋葬した。　マラリアは勢いがとまらず死者は次々と増えた。南部落では、シタダレ川の西の方、ナイーヌ浜にはマラリアが少ない、といって山下の反対をおしきって小屋を移動することになった。新しい小屋は、浜に近く、子どもたちが浜に出ると敵機に見つかる、といって子どもたちに注意し、浜に出さないようにした。

そのころのことである。私たちの小屋に台湾人で背の低い年寄りが来て食べものをせがむことがあった。その台湾人は、カチガー袋を両手と頭の部分だけ破り、それを着けただけのみすぼらしい格好をしていた。炭坑から逃げたものらしく、言葉は通じない。身ぶり手ぶりで食べるものをくれ、といっていた。そのころになると共同炊事はなくなっており、めいめいの家族で食事を準備していたから、私たちは、その台湾人に食事を与えたことがある。ある日、山下が来てこの台湾人をつかまえ、シタダレ川の上流に連れていった。そのあと、誰もこの台湾人を見ていない。あとで聞くと、山下が斬り殺した、ということであった。

みんな島へ帰りたがっていた。食糧も底をつきはじめていたし、西表にいてマラリアで死ぬより、島の自分の家で死にたい、と口々に言っていた。そのころ識名校長先生が石垣の旅団本部に出向いて疎開解除を訴え、許された、ということであった。ところが山下は、これも拒否した。しかし島民は納得せず、挺身隊小屋で総会を開き、満場一致で帰島を決議した。八月に入っていた。人々は喜び、疎開してきたときのように夜間の移動で島へ帰り始めた。

敗戦、島へ戻る

ある日、部落の大人たちが泣きながら小屋に戻ってきた。なぜなのか理由がわからなかったが、人づてに聞くと日本が戦争に負けた、ということであった。「ハイ、戦争は終わったし、安心して島に帰れるぞ」と喜ぶ人もあった。私も正直言ってうれしかった。しかし「戦争は必ず勝つ」と言ってあんなに難儀をしてきたのに、と悔しくもあった。私が島へ戻ったのは最後の方だった。しかし本当の戦争はそれからであった。マラリアと食糧難の中で、人々は生きるために戦ったのである。

マラリア地獄の島

幸い、家にはわずかではあるが、帰島したときのことを考えて食糧を残してあった。しかし私も母も、いえ家族全員がマラリアにかかり、それも食べつくした。私と母は一週間